会　議　名	令和４年度第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　務　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	令和５年２月２４日（金）１８時３０分～２０時００分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 坂井文枝委員 河田京子委員		
欠　席　委　員	加藤治紀委員		
事　務　局　員	コミュニティ文化課文化推進係　　津端　佐原 同　　はけの森美術館学芸員　中村、河上、西尾 同　　はけの森美術館学芸顧問　河合		
傍　聴　の　可　否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会　議　次　第	（１）事業報告等 （２）意見交換 （３）その他、次回日程調整等		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料			

【鉄矢会長】　　皆さん、こんばんは。本日は御多忙の中お集まりいただき、誠にありがとうございます。ただいまより、令和４年度第４回小金井市はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

配付資料の確認をします。事務局、すみません、お願いいたします。

【事務局】　　ありがとうございます。まず、次第が１枚と、前回の議事録を１点置いております。

そして資料１、ホチキス留めのものですね。あと、資料２ということで、スケジュール、横のものが１点。それとアンケートでございます。

それとは別に、本日は机の上に、来月行われるギャラリーコンサートのチラシを置かせていただきました。こちらはお申込み制で、抽選にはなってしまうんですけれども、もしよろしければお申込みいただければと思います。

資料の確認は以上になります。

【鉄矢会長】　　アンケートのものは資料３と４でよろしいでしょうか。

【事務局】　　はい。ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　それでは、次第１、事業実施報告等について、事務局から説明をお願いします。

【西尾学芸員】　　学芸員の西尾です。

去年の１２月１８日に終了しました、丸山晩霞展について報告をさせていただきます。こちらは１ページ目に記載のとおり、合計の来館者数は１，２２９人となりました。こちらの１，２２９人の中には小金井市内の小学生による鑑賞教室の人数が含まれておりまして、それを含めて１日平均が５３．４人。こちら、総合計の１日平均人数となります。有料平均は３９名となっております。

この展覧会では、ワークショップと、映画の上映会と、ギャラリートークを行いまして、丸山晩霞記念館の館長をお招きして、予約等は行わずに、その場で募ってトークイベントを開催したところ、約２０名の方の参加がありました。こちらの多目的室を使って、丸山晩霞に関するスライドトークを行っていただきました。

２の近代日本の山岳映画上映会につきましては、国立映画アーカイブからフィルムのデータをお借りしまして、丸山晩霞と同じ時代、当時の山岳風景をフィルムに収めた無声映画を上映しました。無声映画ですので、情景を学芸員から説明を加えながらの上映会とさせていただきました。

その他、２回のギャラリートークを行いまして、こちらには１５人、１０人と、それぞれ参加者が確認できました。

資料３に、今回の展覧会で集計することができたアンケートの結果をまとめております。総数１，２２９人の来館者のうち２７７名から御意見等をいただくことができました。今回ここまで様々な情報を集めることができましたので、今後はこういった情報を参考に、広報や、企画展の企画を練ったり、そういったところに生かしていけたらと思っております。

回答者の多くはこの美術館に初めて来館された方ですけれども、その中でもお客様がどちらから来たのかという部分を見ると、意外にも他県や東京２３区内から足を運んでくださるお客様が少なくなかったことが分かりました。中には奈良県や山梨県からも足を運んでくださる方がいたというのは、少し驚きました。なので、都度、企画によって企画を鑑賞されるお客様の対象は少しずつ変わってくるかと思うのですけれども、この美術館が小金井市以外のお客様にも開かれている美術館であるということを改めて認識することができる数字かと思いました。

それ以外にも、小金井市のお客様の中からもいろいろとコメントをいただくことができまして、市内にこういった美術館があることがうれしいといったお言葉も何件か確認することができまして、そのことも改めて重要なこの美術館の存在意義であると感じました。

以上で、報告を終了させていただきます。

【鉄矢会長】　ありがとうございました。

何か質問、御意見等ありましたらお願いいたします。

【原田委員】　面白いアンケートで、どうしてこれを知ったかと、２ページ目に書いてありますけれども、この中のウェブサイトとツイッターを合わせると６５人になるんですよね。ということは、２７７人のうち４分の１はそれで見て来ているということ。

【西尾学芸員】　はい。そうなんです。

【原田委員】　ウェブ上での宣伝というのは効果があるんだなと思いましたね。

それから、例えば、休みの日に今日は何をしようかなという人がネットサーフィンをしていて、それでぱっと当たるということがよくあると聞きました。だから、そういう意味でも多いんじゃないかなというふうに思いましたね。そのときに、来てよかったなと思ってくれればいいんだけど、何だとがっかりされてしまうと後が続かないので、頑張りたいと思いますね。

【西尾学芸員】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　そのほか、ございますか。

【山村委員】　　一番最後、別途の４の質問で、６回以上来館されている方が合計で３５名いらっしゃる。もし何か把握してたら、あるいはどんな方か教えてください。

【西尾学芸員】　今すぐにどんな方かということをお伝えできなくて申し訳ございません。３５名の方のなかには、何件か私が今記憶しているところで言えば、やはりいい御意見もあれば、そうでないものもあった気がします。

　この裏面の、皆さんの言葉を書いているところには、どの地域にお住まいの方かということを記載してありますので、そこで小金井市というところを拾っていただくと、少し見えてくるものはあるかなというふうに思います。

【山村委員】　　なるほど。その小金井市の人の意見を見ると、今後も水彩画や日本画の展示を期待していますとか、まあ、初めての方もいらっしゃるんですよね。

【西尾学芸員】　　そうですね。

【山村委員】　　今後も新しい企画展をやってほしいとか、どれもすばらしい展覧会だとか、現地で見た感動が少なくて少々残念でしたとか、いろいろ貴重な意見なので、ポジティブに捉えられるところはポジティブに捉えて、水彩画のファンの常連の方も結構いらっしゃるようですし、やっぱり中村研一記念館だということで固定ファンがいるんだなというふうに改めて思いますので、その辺を大事にして、厳しい意見も含めて取り組んでください。

【西尾学芸員】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　イベントと重なってうるさいと言っているのは、これは何のイベントだったんですか。

【西尾学芸員】　　これは、鑑賞教室ですね。

【鉄矢会長】　　ああ、子どもの鑑賞教室。

【西尾学芸員】　　そうですね。民間の団体から親子で鑑賞するイベントというのがありました。市内小学校の鑑賞教室の際の声量に慣れている私たちからすると大分抑制はされていたんですけれども、やっぱりそういうところでうるさいという御意見をいただくことはありました。

【鉄矢会長】　　でも本当にポジティブに捉えて、小金井は結構厳しい声でも愛がある、いいですよね。

【山村委員】　　そもそも、愛があると思って読まないと駄目だよね。

【鉄矢会長】　　もっと開放的でないと駄目ですっていうね、愛があれば。気持ちは分かりますが、すごい。私も、ああ、開いてないんだって、中にはいつも、何か入りたくなるというか。

【河田委員】　　今の鑑賞教室とぶつかったという感想を見て思ったんですけど、どこかの、世田谷の美術館だったかな、ホームページとかに、この日の午前中は鑑賞教室が入りますとか、何かそういうことを書いているところがあって、そういうふうにお知らせしておくと、逆にそういう方は避けるかなと。

【西尾学芸員】　　御意見ありがとうございます。ちなみに、そのことについても一応館内で検討はしているのですけれども、やはりお子様を持っているご家庭からすると、市内の小学生が確実にいるという状況をネットで告知されること自体に対して不安を持つという意見があったので、そこをまず勘案して対応を練っていきたいと思っています。ありがとうございます。

【原田委員】　　鑑賞教室をやっているよという。この人はうるさいと言ってるけど、絵と関係ない話をしているわけじゃないんですよね。

【西尾学芸員】　　基本的には、親子で絵について話をしながら鑑賞するという。

【原田委員】　　ですよね。だから、そういう意味では、私は子供たちが感想を述べられているということはいいことだと思うんですよね。だから、うるさくて結構と私は思います。

【鉄矢会長】　　実は団体から私に１回頼まれたんですけど、いや、私は運営のここの座長をやっているので、私がやると絶対に通せというようなプレッシャーになるんで。知り合いなんですけど、自分でちゃんとやってくださいと言ったら、ちゃんと通ったみたいで、よかったです。ありがとうございました。

　では、次に、今後開催予定の展覧会について、事務局から説明をお願いします。

【中村学芸員】　　では、２ページ目の２、今後の展覧会・教育普及事業等の、のところから説明させていただきます。

　１）所蔵作品展に関しましては、学芸員中村から報告させていただきます。

　次の所蔵作品展ですけれども、「海と画家との説話性―海をめぐる中村研一の物語―」と題しまして、３月２６日から５月１４日までの会期で現在準備を進めております。

　こちらの所蔵作品展、基本的には今までの所蔵作品展と同じように年度をまたぐ形で当

館の所蔵作品を紹介するものになりますけれども、一つ大きなポイントとしましては、本展より、新型コロナウイルス感染症対策として２０１９年度の末よりずっと実施しておりましたコロナ対策としての短縮開館のスケジュールを全面的に終了しまして、休館日、開館時間等を通常スケジュールに戻すという方針になりました。ですので、午前１０時から午後５時までの開館時間で、休館日は月曜日とするという形になっております。

それ以外に、関連企画といたしましては、現在のところギャラリーコンサートが３月２５日、こちらは会期の前日に予定されておりますのと、それからワークショップは３月２９日に地元の児童文庫である「こごうちぶんこ　ことりのへや」の皆さんを講師にお願いしまして、「海とわたしの物語」という読み聞かせと、それから絵を描くワークショップを予定しております。

こごうちぶんこさんに講師をお願いしてワークショップをするというのも、コロナ対策を実施しておりました間はちょっとできなかったので、２０１９年以降はそういった形での連携をストップしていたんですけれども、今回の展示でお願いをしまして、久しぶりに開催予定です。

ただ、こちらのワークショップは、まだどのぐらい来るかというところが、久しぶりなのもありまして読み切れないところもありますので、受付をして、予約をして申込みをするというような形ではなく、申込み不要で当日に来ていただいて、大まかに１５組程度を先着で受け付けるような形で、ちょっとここは当日の状況を見ながらやっていくような形になるかと見ております。こごうちぶんこさんのほうでも準備をしていただいています。

３番と４番の関連企画に関しましては年度を改めて次年度の扱いになるものですけれども、こちらは中村研一の誕生日を記念した無料開館日が５月１４日、会期の最終日に予定されております。５月１４日というのは会期の最終日でもあるんですけれども、中村研一の誕生日を記念して無料開館日を１日設けるというのは、所蔵作品展が年度をまたぐものでずっと行われてきたものなんですが、今年は誕生日当日がちょうど５月１４日の会期最終日に当たっておりますので、最終日の、本当に誕生日の当日に無料開館日を設けることにいたしました。

それ以外に、ギャラリートークは今のところ２回の形で考えておりまして、４月２２日と５月１３日、無料開館日にギャラリートークをすると、ちょっと収拾がつかなくなりそうですので、前の日に行う形で２回予定をしております。

所蔵作品展に関しましては、以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございました。

加えて、その他にある調査研究活動が抜けているような気がします。

【中村学芸員】　　申し訳ありません。では、こちらを補足させていただきます。

今年度、ポーラ美術振興財団から、市内にアトリエがあります富永親徳という画家についての研究に対して、この美術館に助成金が出ているんですけれども、こちらの助成金で行っている研究の一環といたしまして、２月１６日と１７日に、この画家に関する調査を千葉の勝浦で行いました。

この富永親徳という画家について分かっていることは少ないんですけれども、今分かっている限りでは、定展に出展した作品が千葉の勝浦のあたりに主材するのではないかということで、実際に現地に行って、本当に描いている場所が見つかるかどうかということで、フィールドワークでぐるぐる回って、とにかく写真と海岸の様子を見て、その辺にいる漁師の皆さんにも話を聞くという形でフィールドワークを実施いたしまして、その結果、よく似たところが見つかって、多分ここでいいんじゃないかなというところまではっきり見つけることができたんですけれども、逆にそのことによって画家本人が見たままの実景を描いているのではなくて、取材をして、最終的に取材したものを調整して、適宜要るものを合成したり、要らないものをカットしたりという形で、画面としては見たままの風景ではない理想化されたものを書いている可能性が高いというところまで、調査の中で見当をつけることができました。

ただちょっと、この間行ったばかりでして、まだその辺りの結果がまとめられておりませんので、年度末に向けて、そうしたところの調査結果はまとめていきたいと考えております。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

何か御意見、御感想、質問等ありましたらお願いします。

【坂井委員】　　質問なんだけれど、読み聞かせワークショップに関して、もう少し詳しく教えていただけますか。児童文庫というのは図書館なんですか。

【中村学芸員】　　はい。まさにその後ろに、こごうちぶんこさんの説明のパネルがあるんですけれども、こごうちぶんこさんは、もともとそちらにある小河内さんという方が地元で長らく児童の……、本に対する親しみを持ってほしいということで、図書館学のほうではかなり第一人者として知られた方だそうですけれども、その方が個人的に集めた児童書を自宅で開放して、こごうちぶんこという名前で活動されていたそうなんです。その方

の意志を継いだ有志の方々が、今、「こごうちぶんこ　ことりのへや」という形で活動を継続しておられまして、市内の別の場所でこごうちぶんこさんとして活動する場所を今持っていて、定期的に本の貸出しですとかそういうことを行われているんですけれども、もう、これは２０１４年か５年だったと思いますけれども、一部の本がこちらにありますように、美術館に寄贈されたんですね。この本の活用方法といたしまして、こごうちぶんこさんに講師をお願いして、ここにある本を活用して読み聞かせをして、展示の内容と絡めて、何か制作のワークショップなんかをしようということで、これは決まり事として取り交わしたというよりも、結構、自発的な形で、以降、毎年１回ずつぐらいで続いてきたんですね。

【坂井委員】　　ああ、そうなんですか。

【中村学芸員】　　毎回毎回、展示の内容に合わせて、仏様の絵をみんなで描いてみるとか、掛け軸のようなものを作ってみるとかという形で、結構そのときどきで制作のワークショップをいろいろ工夫してやってきていたんですけれども、やっぱり２０１９年に、ここが緊急事態宣言で開けなくなってしまったというところあたりから、こごうちぶんこさんのほうでも児童文庫としての活動にかなり制限が入って、貸出しのほうでもかなり厳しかったようですし、やはりそういった形で人を集めてイベントをするということがこちらでもできなくなってしまったので、そこで自発的な連携というものがストップしてしまう状態になったんですけれども、今年あたりからワークショップ、当館のほうでもだんだん動き出したということで、こごうちぶんこさんに聞いてみたら、密集しなければ、ここである程度そういう活動は可能なんじゃないかということだったので、それで１回打合せをいたしまして、できるだけ、気負った感じで参加するんじゃなくて、ふらっと立ち寄れるような感じで、でも一応、感染対策としては気をつけていますよという形で、参加する人に不安を与えないような感じでできないかということで、今回こういった形を考えてみたんですね。

【坂井委員】　　海に関する本の編集みたいな感じで、その展示、観覧をするって書いてあるんです。

【中村学芸員】　　そうですね。今、こごうちぶんこさんのほうで読み聞かせの本をどれにしようかということも考えてくださっているそうです。

【坂井委員】　　なるほど。児童文庫ということで、児童書が中心なんですか。

【中村学芸員】　　そうですね。そこを開いていただくとすぐに分かるんですけれども、

絵本がいっぱい入っていて、お話の絵本もありますし、科学遊びとかそういうものもあります。

【坂井委員】　　分かりました。ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　そのほか、質問等ありますか。

【山村委員】　　今後の展覧会の所蔵作品展でしたけれども、所蔵作品展はまだいいんですけど、「海と画家との説話性」の「説話性」というのが分からないので今引いたんですけれども、説話性ってあまり使わないんですね。「説話」は使うけど。これはどういう意味なんでしょう。

【中村学芸員】　　そうですね。ここは説話だとちょっと……、これは引っかかりという形で、あえて「説話性」という、あまり使わない言い回しにしています。

単純に海を描いた作品を集めましたということではなくて、ここでは今回、ちょっとテーマにする中で、単純に海を描いただけではなくて、画家が、もうここにはない海というものを、特に小金井に越してきてからアトリエの中でイメージして描いたんじゃないかなと思わせるようなものも紹介していきたいと考えているんですね。

中村研一の人生を考えていくと、やはり前半生の中ですごく実際に海に接して、海を見て、いろんな人生の契機を迎えたことと同時に、小金井に引っ込んでしまって海を直接見ることがなくなってから、いろんな形で自分の人生をエピソードとして思い出して、その中で海のイメージというものを育んでいくというところがありますので、そういった形で自分と人の関わりというのが一つの物語として画家の中で育まれていくことに対して、そのまま説話と言うのではなくて、物語を生み出す土壌として「説話性」という形で表現しています。

【山村委員】　　今の説明を聞いて何となく分かったんですけど、一般の人はちょっと分かりにくいんじゃないかな。

【中村学芸員】　　そうですね。ここは、あえてそういった意味でいうと、あえてそういう分かりにくさで、引っかかりとして興味を持ってもらうというところで、意図的にちょっと分かりにくくしているところはあります。

【坂井委員】　　画家の海とのつながりというのは、小金井の前の住まいが海沿いだったりしたんでしたっけ。

【中村学芸員】　　いえ、生まれたのが宗像市で、その後１年間新居浜に行っていて、どちらかというと新居浜でかなり、海に浮かんでいる船に対して興味を持っているんですね。

これは、むしろ中村研一よりも弟の琢二のほうが幼少期の日記を書いていまして、小さい頃の日記なので、お兄さんが船を作って、羨ましいんだけど、その船をお兄さんが貸してくれないとか、いろいろ書いてあるんですけど、そういった形で、かなり小さい頃に自分で船の模型を作って、それを弟に見せびらかしたりしている。恐らく、それは１年間だけだけれども新居浜に住んで、造船所であるとか、そういうところで船のイメージを見たことがかなり強い印象として残っているところがあります。

大人になってからも、１９３７年にイギリスにジョージ５世の戴冠式で行っていて、そのときに、やっぱりかなり改めて、海の上に浮いている、特に軍艦のイメージというものに対して強いイメージを持っていて。

【鉄矢会長】　確かに、絵が多いですよね。

【中村学芸員】　戦争中、やっぱりそういうことで言うと、本人は直接見てないんだけれども、ソロモン沖海戦であるとかマリアナ沖海戦というものをやたら描きたがるところは、多分、本人がすごく船に対する強い興味の中で船を描こうとするところがあって、一生懸命、軍艦だとかを、これはこういうところに煙突がついているのかという形で、細かく形を見て描いているんです。ただ、それがやっぱり戦争とかなり強く結びついてしまった結果、戦後になると、船を描くことで、少なくとも軍艦のイメージを明確な形で絵に残すということはやらなくなっていくんです。これについて本人は何も言っていないけれども、恐らく、戦争中に、戦いの、戦争画のイメージとして軍艦のイメージを多用したことと無縁ではないと思います。その代わりアトリエに引っ込んで、奥さんにわざわざ水着を着てもらって、全然、海でも何でもないのに水着を着てもらって、「夏」というタイトルで奥さんの肖像画を、絵を描いたりしているというところで見ると、恐らくそうやって自分が直接的に描くことのなくなった海というモチーフに対して、小金井で何かしらの思いを馳せながら描いていたところはあるのかなと思っています。

【山村委員】　話を聞くと面白いんだよね。

【鉄矢会長】　面白い。

【坂井委員】　話を聞くと、本当に。

【山村委員】　例えば、海と画家との物語にして、副題で、海をめぐる中村研一の絵画とイメージとか、そんなほうが分かるんじゃないの。

【中村学芸員】　今回、ここはあえてそういうことで、分かりづらく。

【原田委員】　そうですね、「説話性」で、言葉の。

【中村学芸員】　　引っかかりのほうをちょっと優先した形になっています。

【山村委員】　　まあまあ、そこは……。

【原田委員】　　ただ、一般の私のような者が見たとき、説話性って何だろう、難しそうだなということでブレーキがかかることもあるかもしれない。そういう意味では、これは逆にしたほうがいいかなとも思うんだけど。海をめぐる中村研一の物語、ああ、面白そうだなと。よく見たら説話性と書いてあるけどこれは何だろうというふうになって。

【山村委員】　そうですね。

【原田委員】　　うん。あと、あれですね。さっきの水着で面白いなと思ったんですが、例えば、喫茶店のあった建物の絵がたしかあったと思うんだけど、日よけがありますよね。

【中村学芸員】　　はい。

【原田委員】　　あれも何となく、海辺っぽいなという気がしますね。さっきの話で。

【中村学芸員】　　多分、奥様の感じで言うと、水着のモデルをするということに対してなにがしかの抵抗があったのではないかと思うんですけれども、ただ、やっぱりそういう奥様に水着を着てもらって、水着としてもワンピースタイプの水着で、色がかなり鮮やかな印象が強いものなんですね。それを着ていることを前面に押し出した絵を描くというところには、何かしら、やっぱり本人が描きたいものが、連想しているものがあるんだろうとは思っています。

【山村委員】　　説話というと、神話とか、伝説とか、民話とか、自分の……、まずフィクションですよね、何か物語という。自分の記憶だとか、いろんなイメージだとか、そういう虚構だとか、それも含めた話なので、今の説明ですごくよく分かったし、面白いと思うんですけど、一般に対して、そこはもうちょっと検討していただければと思います。

【中村学芸員】　　そこはちょっと、チラシのイメージ、デザインで少し工夫を図りたいと思います。

【鉄矢会長】　　「画家の説話性」なんでしょうね。「画家との説話性」……。

【山村委員】　　そうですね。画家の説話性。画家の説話性がすごく複雑なところ

　　。南方のイメージもありますもんね。

【河田委員】　　そうですね。

【鉄矢会長】　　そのほか、ございますか。

　鉄矢からですけれども、ぜひ、この調査研究活動、勝浦で見つけたこういう動きというのを、中学生の学芸員の体験活動を受け入れたりしていますよね。

【中村学芸員】　　はい。

【鉄矢会長】　　ああいうときの説明に使えるものを意識して資料を作っていただけると、こんなに面白いことを学芸員ってやるんだよというところだろうなと思って。学芸員って何、学芸員の仕事って何といったとき、集めて、絵を描けて、すぐになるとかという話じゃなくて、こんな面白いところを取材して、足が棒になるまで歩いて、それでも探して探して、こうじゃないって、何を頼りにそうやっているのかとか、ここの面白さって多分、我々に伝えていただくのもそうなんですけど、次世代の子供たちが学芸員って何なのかと思うときのネタになるような、何か報告を考えていただけるといいなと思っています。

【中村学芸員】　　ありがとうございます。

【山村委員】　　これって本当に、実際難しいですよ。自分なんて、とてもこんなの無理だと思うんですけど、例えば、風景に特徴のある山だとか、特徴のある海岸線だとか、島だとかのあたり。

【中村学芸員】　　そうですね。港の絵だったので、港の先に崖みたいな切り立った岬が突き出していて、そこから小さい堤防が出ていて、高台から見下ろす視点だという、その辺りから、多分太平洋側で、かつ、富永さんのアトリエを調査しているときに千葉の興津からのはがきが見つかったんです。どうも何回か逗留しているということが分かったので、その辺から当たりをつけていって、とにかく海岸の辺をぐるぐるしていたということで。

【鉄矢会長】　　美術探偵団、すごいな。

【山村委員】　　何か、犯罪のね、　　。

【中村学芸員】　　刑事みたいですね。刑事の聞き込み調査。

【鉄矢会長】　　絶対これ、中学生は楽しいと思うよ。いや、書き方によってですよ、本当に書き方によって楽しくもなるし、ただつらい調査にも見えるし。

【河上学芸員】　　楽しかったですよね。

【中村学芸員】　　今回、河上が漁師さんたちにかなり積極的にいろいろインタビューをしてくれまして、それでいろいろなことが分かったのも。

【鉄矢会長】　　あと、はけの森美術館で中村研一以外のこういう生き生きした調査を聞いたのが、僕、初めて。

【山村委員】　　今まで、ありましたよね、何だっけ、風景の展覧会。

【中村学芸員】　　はい、国立公園展。

【山村委員】　　あのときもそうでしたね。この場所を探して、写真撮って。

【中村学芸員】　　そうですね。あれはでも、ただ、国立公園の各ソルジャーの人たちが調べてくれたものを、こちらは結果として受け取る形だったので、こういう形でここから出かけていったというのは、恐らく今回が初。

【鉄矢会長】　　そうですよね。やっとこういうことができたということを、僕はすごく評価します。ぜひ今後もこういうものをやって、それを市民に、こんなに調べて、こんなになっているんだというのが、美術探偵団だというのを。

【山村委員】　　中村研一でやり出したら大変ですよね。いっぱいあるから。

【中村学芸員】　　そうですね。

【原田委員】　　将来、富永親徳の展覧会をやる可能性もあるんですか。

【中村学芸員】　　やれたらいいねということでは。

【原田委員】　　そのときには、ぜひその取材過程も展示物の一つにしていただけると面白いですね。

【鉄矢会長】　　私たちだけでこんなに楽しんじゃいけない。

【山村委員】　　ねえ、実際大変だと思いますけど。

【鉄矢会長】　　あと、すみません、もう一つ。なぜ、これがマリンバなのかがよく分からなくて、ごめん。なぜマリンバで、この人たちなのか。まだ安倍圭子先生のものとか久石譲のものが前に出てくるより、いきなりトルコ行進曲からプログラムに入っちゃうの、もったいないなと思って。海が前に出てくれればよかったのになと思って。

【原田委員】　　一応、海にちなんでいるということですか。

【事務局】　　はい。海にちなんだ曲も、今、４つ書いてあるんですけど、これだけじゃなくて、十何曲あるうちの今決まっているのがこれだけという感じなので、ほかにも海にちなんだ曲もやっていただける予定です。

【鉄矢会長】　　ぜひ、頭に出すのは海のほうを前に出したほうがよかったと思うので。

【事務局】　　なぜマリンバか、ということに関しては今回、小金井宮地楽器ホールと一緒にやらせていただくんですけれども、楽器に関しては小金井宮地楽器ホールの担当者の人と話合いをして、実際にここのはけの森のイメージを重視して、マリンバを選んでいただきました。

【鉄矢会長】　　ちょっと、それは説明してほしいです。あと、小金井市在住とか、そういう文章をどこかに入れておいてあげるとよかった。今後だと……。

【事務局】　　分かりました。

【鉄矢会長】　今後でもいいですけど、無理矢理のミスマッチとか化学反応を期待するものがあったとしても、ちょっとだけ、ふーんと思いたいです。

【事務局】　ありがとうございます。

【山村委員】　それがあると違いますよね。

【鉄矢会長】　ほかにございませんか。

では、企画展のほう、お願いします。

【河上学芸員】　資料１の３ページ目の２）企画展、次年度の①展覧会、企画展について、学芸員の河上からお話しさせていただきます。

こちらにありますとおり、まだタイトルが決まっておりませんが、仮のものを入れております。「笹川治子、中村研一展」（仮）といたしまして、企画展を開催予定です。

まず基本情報からいきますと、今回３月からの所蔵作品展が５月に終わるんですが、そこから丸っと夏の暑い時期を飛ばしまして、９月２日土曜日から１１月５日の日曜日までを会期として予定しております。こちらも引き続き開館時間１０時から５時、休館日は月曜日。観覧料につきましてはまだ予定でして、検討中の段階でございます。

次のページ、助成というところで、こちらの企画展に関しては実は助成の申請を幾つかしておりまして、今月、こちらの公益財団法人花王芸術・科学財団から助成を受けることが決まりまして、こちらに記載しております。今月末にもう一つ、朝日新聞の財団の助成の結果待ちを今しているところなのですが、そちらは未定です。

タイトルのところに戻りますけれども、展覧会名のところ、「笹川治子、中村研一展」（仮）とありますとおり、こういうふうに見ますと二人展みたいな形になるんですけれども、ここら辺をどうするかというところも含めて、今、検討中の段階です。笹川治子さんという作家さんは現代作家になるんですけれども、笹川治子さんの作品と、当館の中村研一コレクションを合わせて展示をして企画展をするという内容になっておりまして、こちらの４ページに概要も、本当にざっくりとしたものを書かせていただいたんですけれども、笹川治子さんという作家さんは、これまでフジタの研究を軸に作品制作を行っているというところが最初にありまして、特にメディアとしての戦争画という研究をずっとしながら制作をされているような現代作家さんで、主に映像作品とインスタレーション、前回の志村信裕さんのようなイメージをしていただけると少し分かりやすいかなと思うんですけれども、映像を別途つくって、さらにそれをインスタレーションにするというような作品をつくっていたり、もしくは本当に造形物、立体作品を作ってそれを作品として見せる、も

しくは平面作品ですね、絵も描いていらっしゃるので、いろいろな方法でアート作品を発表している、そういう作家さんになります。

今回の企画に関しましては、はけの森美術館で展覧会をするというところに焦点を置いて、笹川治子さんが中村研一の作品をとおして戦争画というものをどう捉える、メディアとしての戦争画ないし、それがメディアとしてではなくて本当に絵として、絵画としての戦争画、絵画としての一面からのアプローチというものを、彼女の作品をとおして見せるというような、うまく説明できたかどうか分からないんですけれども、そういうところをテーマにした展覧会を今、企画中でして、まだ具体的なプランというのは、担当は今回、私と西尾の２人でするんですけれども、今、３人で話し合いながら進めているような状況です。

関連企画としましては、こちらも全て未定で、これから詰めていくようなところなんですけれども、一番はトークイベント。これは大人向けの講演会ないし対談などのトークイベントを、ゲストスピーカーをお招きして講演会をする、もしくは笹川さんとそのゲストスピーカーが対談をするというような形の、大人向け、大人向けといいますか、そういうイベントを一つできたらいいなと思っています。

２番目は、子供向けのワークショップ。これは絵を描くワークショップというふうに当館としては笹川さんにお願いをしていて、というのも、今回の展覧会が戦争画というところに注目をしつつも、戦争画の絵画としての一面に焦点を当てるようなものも含まれますので、絵を描くことというところをテーマにした、絵を描くワークショップをしていただきたいと考えているところです。

３番目は、いつものとおり、企画展の会期中はギャラリートークを何度かするというところで、担当学芸員がギャラリートークをしているんですけれども、今回は笹川さんにもギャラリートークをしていただけたらいいなという画策を今していて、これも調整中です。

その他、参加型ワークショップ。会期が少し長くて２か月ありますので、もう１本、参加型のワークショップができればいいなと思っております。

①の展覧会については、以上です。

【山村委員】　　続けて②番も。

【西尾学芸員】　　②令和４・５年度市町村立美術館活性化事業　第２３回共同巡回展福岡アジア美術館所蔵作品展、「うるおうアジア　―近代アジアの芸術、その多様性―」こちらを担当させていただきます、学芸員の西尾です。

こちらは今年の１２月２日から１月２８日まで、年をまたいで開催する企画展となっております。

ちょっと先ほどの２本の展覧会と異なりまして、休館日を月曜日、火曜日と、コロナ禍と同じ日程にしております。この理由は、助成金の申請が去年の１１月となっておりまして、その頃には２０２３年４月以降にコロナが５類になるという予想ができませんでしたので、どのようになるか分からないという状況で、コロナ禍と同じ日程で申請をしました。そのため、これを急に４月から５類になるからといって月曜日のみを休館日としてしまうと、当初申請していたよりも開館日数が長くなってしまうということで、そうすると申請金額が、入館料が増えるといったところで齟齬が起こってしまうことも含めまして、こちらは先方の財団とも相談した結果、月曜日、火曜日を休館のまま、開館時間のみを１０時から５時までの、コロナ以前の開館時間とするところで決定しております。なので、ここのところでお客様に誤解を招かないように、開館日数の告知については何らかの別の手続で行っていきたいと思っております。

入館料は、助成金の申請時の通り一般５００円、小中学生２００円という金額で設定しております。これは先ほどちょっと話に出ましたけれども、国立公園展と同じ一般財団法人地域創造というところから助成金をいただきまして、このたびは広島県の廿日市美術ギャラリー、四日市市市民文化会館、上田市立美術館と当館の４館で、福岡アジア美術館さんからコレクションをお借りしまして、企画を立てて行う展覧会となっております。

この１年間を通して全４回、各館の担当学芸員が顔を寄せ合って会議を行ったり、オンライン会議等を重ねて、どのような作品を出品するかというところから話を詰めまして、各館の美術館の規模ですとか、各課の得意分野とか、そういったところからすり合わせた結果、近代と一言に言ってもアジアの地域によって近代のスタートは異なるので難しいのですけれども、主に１８００年代後半から２０世紀前半頃の福岡アジア美術館所蔵の作品を概観するという展覧会となりました。

この時期の作品といいますと、私たちが想像する中村研一のような、いわゆる美術教育を受けて美術を学んで、近代美術と呼ばれるような作品を生み出した作家もいますし、それ以外にも中国やインドで制作されたポスターですとか、あとはチャイナトレードといって、中国で海外輸出用に制作された油絵や写真が挙げられます。そういった作品をできる限りシームレスに展示することでアジアの近代の様相というものを見ていこうといった企画となっております。

イベントについては、当館での開催が１２月２日となっていることからも、現在まだイベントの内容等を調整中でして、決まり次第こちらの会議でも報告させていただきたいと思っております。今現在、確実に言えることとしては、担当学芸員のギャラリートークを予定しております。

以上です。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

質問や御意見あれば、お願いします。

【坂井委員】　最初のほうの笹川治子さんのものですけど、花王芸術・科学財団から助成を受けられるような経緯というか、関係性について教えてください。

【西尾学芸員】　助成については、私から花王財団へ助成の申請を行いました。市の予算では通常獲得が難しいような、しかし展覧会を開催する上では必須の予算というものがございます。そのために助成金を申請して、展覧会をより豊かにしていくという制度がございます。なので、こういった美術展覧会を開催する上で、美術館が予算を獲得するために様々な財団が助成金の制度を用意しています。

【鉄矢会長】　公募ですよね。

【西尾学芸員】　そうです、公募ですね。

【坂井委員】　それに選ばれたということ。

【西尾学芸員】　はい、そうです。受けることになりました。

【坂井委員】　あと、もう一つよろしいですか。福岡アジア美術館って、何か福岡のまちにあったような記憶がなくはないんですけど、何か、ビルの上にあるところ。

【西尾学芸員】　そうです。

【坂井委員】　でも、行ったことはないんです。１８００年から２０世紀の前半というと、いわゆる陶磁器とか織物の伝統芸術ではないんですね。いわゆる作家性のあるあれなんですね。

【西尾学芸員】　そうですね。その辺りが、実は福岡では３つの美術館が役割分担をしています。福岡市立美術館からアジアの近現代の美術を集めるということで分裂したのが福岡アジア美術館なんです。なので、どちらかというと工芸と私たちが一般的に呼んでいる分野の作品もないわけではないのですけれども、それはどちらかというと博物館のほうに収蔵されていたりするので、陶磁器とかそういったものはやや少ないというところです。

【坂井委員】　なるほど。

【河合学芸顧問】　　学芸顧問の河合です。アジア美術館はある意味では非常に、九州地区が世界戦略の中で、経済戦略の中で、アジアに向かおうと。それで橋頭堡としてと言うとおかしいんですけども、美術を。だから、うんと増えてからやるよりも、同時代で、みんなで何か支援し合おうと、それが最初だったと思います。

大体、それが美術館まで行かなかったんですけども、集めて共同で何か一緒にやろうというのがきちんとした美術館になっていって、専門家も、本当にそのための専門家、学芸員も置くようになったということなんですね。

【河上学芸員】　　そうですね。ドイツのほうにも、文化庁の研修でドイツに滞在してリサーチをそちらでもして、それを踏まえたところで作家として作品を作り上げるという。なので、御本人は、私は研究者ではないですとおっしゃるんですけど、本当に研究者の顔もお持ちなのではなかろうかというふうには個人的には思っているところです。

【山村委員】　　さっきの調査の場所の話もあれですけど、本当に調べて、物と、事実関係と、何がプロパガンダで何が事実か、何がフィクションでということを厳しくやる人なので、これはだから、何ていうか、中村研一についてそれをやると思うので。ただ、そのときの担当学芸員も東京都美術館の学芸員が二人三脚でいろいろ聞いて事前に見せて回ってということをかなりやったので、十分注意してください。

【河上学芸員】　　十分注意します。はい。

【河合学芸顧問】　　２人だけの話になっちゃいけないですけど、東京都美術館で、戦争画というか、やっていたわけですよね。発表したのが、都美術館でやったのが最初。

かなりさらされてはきてるというか、一応ね。あえて言うなら、あえてと言っちゃ失礼ですけども、そういう形の中でブラッシュアップしていくというのも事実だろうと思うし、一応、私自身も意識しながら、たしか、冊子でしかなかったけれども、担当を任されました。まだちょっと時間があるので、かなりまだこれから詰めることもいろいろ……。ちょっと、乞う御期待。

【山村委員】　　ちょっと心配してる　　。

【河合学芸顧問】　　心配していただいたほうがいいと思う。

【原田委員】　　質問ですけど、この展覧会、そうすると中村研一の作品は戦争画だけが出てくるの。そうじゃない。

【河上学芸員】　　ではなくて、本当に絵画というもの、絵というものがどのように生まれて、それがどういうふうに人に見られて、それが絵画として受け止められる場合と、先

ほどのようにプロパガンダ、メディアとして受け止められるかは、その状況によって変わったり、その時代によって変わったりというようなところを、これまでもそれは戦争画という括りだけではなくて、私たちがさらされているメディアというものについていつも疑いの目を持って彼女はいろいろとリサーチをして作品に反映させることをしているんですが、戦争画も含まれると考えていただけるといいかなと思うんですが、でも、どうしても、やはりこの美術館のコレクションの中村の戦争画というものにここまでフォーカスする展覧会、恐らくなかったかなと思っているので、そこのあたりをどう上手く企画展覧会として成立させるかといいうところを、今、本当に笹川さんと一緒に練っているところです。

点数としては、中村研一の作品を恐らく２階にも、いつもの２階の展示室のほうにも、学芸と笹川さんと一緒に企画をして、中村作品の素描を展示しようと考えているんですけれども、それを含めると多分３０点以上は中村作品が……、３０点以内ですね、今のプランでは３０点以内の作品が展示されるのかなというところですけれども。

【鉄矢会長】　鉄矢ですけれど、よろしいですか。１年前だったら、それですごく面白いねって言って、興味深い、こういうことなんだということが言えたのが、ウクライナの問題のリアリティーを持ってきたものが、多分、彼女に物すごく影響を出しているんじゃないかなと思っていて、その辺は避けて通らないほうがいいと思う。避けて通らずに、やっぱり現代作家だから、ナイーブな分、その辺がもっと描いてくるので、後で批判されてもいいから、そこが来ちゃったらそこをちゃんとやっぱり見せてあげれば、時代の読みかなとは思うんですね。無理矢理、中村研一だけというのも、やっぱり目の前にそこがあるので。なので、ゲストスピーカーによるトークイベントというところが、ゲストスピーカーでなく、本館の学芸員との本気の、ガチのトークイベントをやったほうが、その後のギャラリートークは、何となく、普通に、こうですよ、ああですよと作品を前にしゃべるんですけども、このプロセスをもし本当に悩んで話し合ってつくってきたんだったら、ギャラリートークは、ここの学芸員とのギャラリーが私は聞きたいです。

【河上学芸員】　ありがとうございます。このトークイベントについては、何人かの方で候補の方がいるんですけど、まだどういう形かというのは、まだ整っていないので。

【鉄矢会長】　あとは、ファシリテーターが、学芸員がやるというのはあるかもしれない。

【河上学芸員】　そうですね。

【鉄矢会長】　何人か、ほかの。

【河合学芸顧問】　　そこは当然でしょう。

【鉄矢会長】　　その司会というか。

【河上学芸員】　　そうですね、そこは必ず入るようにしますが、どういう形になるか分からないんですが、恐らくここのトークイベントに関しては、やはり戦争が、こういうところが従軍画家としての研一というところとか、あと笹川さんの考える、ただ、笹川さんが、お話が、とても消極的で、今、頑張れ、頑張れと言っているところなので、言って、言ってと言っているような段階なんですけど、本当にここはまだまだお話の余地がたくさん残っていて。かつ、やっぱりその中でも肝になるイベントになると思っているので、今の御意見、とても貴重です。ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　特に美術館の肝になるのは、学芸員の意思だと思っているんですよ。その学芸員の意思が少しでも見えてほしいな、見せてほしいなというのが、やっぱり展覧会をつくる企画性の一番の面白さじゃないかなと思っているので、そこをぜひよろしくお願いします。

【山村委員】　　今日は指導室長がお休みなのであれなんですけど、これは教育委員会としての立場もあるんですよ。政治的に見せなきゃならないとか。今本当に社会が悲報なので、今、鉄矢委員がおっしゃったようなもの、明らかに重厚の社会として　　があふれているような状況の中だから。２０１７年でしょう、随分違うもの。だから、すごい神経質にならざるを得ないんだよね。そこら辺の時代も激減している、移動しているということをよく踏まえた上で、どこが火がつくか分からないというような意識を十分持って、教育委員会とよく話ししながらやったほうがいいと私は思いますよ。今までのような気持ちで、このぐらいだったらいいと思ったことに火がつく可能性がありますのでね。

【河合学芸顧問】　　そういう話が昔あって、戦争が、ずっと引いてきたというふうにも私は聞いているんです。そのままでずっと来たのも事実なんですね。だからこそ逆に今、まさに、それを１回通るか。ただ、当然、その根拠というか、学芸員としても意識してきちんとというのはあると思うんですね。それを本当にどこまでその作家ときちんと分かり合えているというと言葉は悪いんですけれども、作家も何回もここに来てくれて、だんだん今、モデルにしている最中だと思うんですね。私自身も、申し訳ないですけど、全部に情報をもらっているんじゃないので、まだ言えないんですけども、その辺はすごく、将来的には、若い世代ですけども、こういう問題のところに関してはきちんと踏まえたところで認識してくれると思うので、また、私自身も少しその辺は、ちょっかい入れるんじゃな

いんですけども、のぞき込むことはさせていただくつもりです。

【河上学芸員】　　ちなみに、ちょっと世代の話だったので。笹川さんの生年を入れるのを忘れた。１９８３年生まれの作家さんなので、３９歳です。志村さんと同じ年ですね。

【山村委員】　　あと一つ、いいですか。その次の展覧会の福岡アジア美術館所蔵作品展というのは、これは企画によって全然中身が変わってくるんですが、この４館、それからアジア美術館の人も含めて、誰が中心になってやるんですか。

【西尾学芸員】　　それは各館が助成金の申請に手を挙げた理由、なぜこの福岡アジア美術館の作品を借りて、展覧会を行いたいと思ったのかが、各館違うというところが最初の一番大きなテーマとなりました。また当館の規模だと、トラックの大きさとか、あと美術館の搬入の入り口の問題で、そもそも搬入、搬出できないというような問題もあります。それは当館だけでなく四日市市民文化会館もそうだったのですけれども、いかんせん展示室が狭いので、そういったところからもある程度絞られるというところがあったのと、あとは、一緒に企画を立てております上田市立美術館とはけの森美術館は、近代の日本の作家を中心とした展覧会ですとか調査を基本的に行っている美術館というところもありまして、そういったところから、徐々に徐々に作品が絞られていきまして、最終的に近代アジアの、主に絵画、写真というところに落ち着いたという経過があります。なので、いろいろ議論が生まれる場もあったのですけれども、お互い話し合う中で落としどころを見つけていったというところです。どこが主導して決めたとか、そういったことよりは話し合って落としどころを見つけていったという感じです。

【山村委員】　　近代と現代で全然違うんですね。近代の場合は、例えば台湾は旧植民地だし、満州のところも結構、以前あるし、中国、東南アジアの、そういうのは国によって全然違う。さっきの戦争問題とすごく絡んでいるんだけど。

【河上学芸員】　　はい、すごくそうなんですよ。そうなんです。

【山村委員】　　すごく微妙な話。今、特に台湾は中国でどうのこうのという話もあるし、アジアの話というのは本当に気をつけなきゃいけないので、これも慎重に。また学芸員の調整は大変だと思うんだけども、誰が中心にやったほうがいいか。そこは、話合いというのはなかなか難しい部分があると思うので。または、上田とはけの森が中心になるとか、そんなほうがいいんじゃないのかなとは思うんですけどね。

もしくはアジ美の常設をモデルにしてやったほうが、私はいいと思いますけど。

【西尾学芸員】　そもそも各館がなぜ手を挙げたのかという事情とも絡んできて、やはり

多文化共生という意味で、自分の地域に住んでいる外国人居住者の方に作品を見てほしいというところであったり、ちょっと変わった作品を見てほしいというところがやっぱり起点にあったり、と各館の目的が様々ですので。

【原田委員】　ちょっとよろしいですか。私、今までの話を伺うまでは、こういう各館に寄ってやるものというのは、さっきお話出たように、もともとの館のパッケージがあって、はいって手挙げて、随分楽ちんだなと思っていたんですよ。助成金もついて。そうじゃないということも分かって、逆にもう心配になった。

ただ、さっき会長おっしゃっていたように、もしうまくいかないところがあっても、４館の学芸員が議論をして、いろんな不満も残ったりしても、次のステップのためには、こういうやり方というのは貴重だなと思いました。

【西尾学芸員】　どの館も、それなりにこの企画に参加したことで得るものがあるのであれば、それはよいのではないかと思います。その点に関しては、クリアできているかなというふうには感じているので。

【鉄矢会長】　情報提供なんですけども、東京学芸大学が創基１５０周年を来年度迎えまして、そのときにアジアの４つの大学、４大学で今までサークル展といって、持ち回りでずっと毎年展覧会をやっていたものが、１１月にタイと台湾と韓国と日本と、もしかしたらもうちょっと入るかもしれませんけど、マレーシアも入るとかいう、今話が出ていますけど、そういうふうにアジアが入ってくるので、このときにチラシを置いておくことができますという。うちのほうは、学生と各大学の教員の連合の展覧会になるんです。

【河上学芸員】　ぴったり。会期はどれぐらい。

【鉄矢会長】　１１月の２週間ちょっとぐらいやると思う。

【河上学芸員】　直前ですね。

【河合学芸顧問】　学生展ですか。

【鉄矢会長】　学生と教員です。向こうから来るのも、教員が何人来るのか分からないですけど、チェンマイのラチャパット大学というところから何人か先生たちが来て。これは情報です。

それから一つ、やっぱり気になるのは、せっかく月曜だけ休館だったのに火曜がという、そこのさっきの助成金の先方との兼ね合いで収入が増えちゃうと、向こうはそれの助成率が、率で助成するから、出せないよという話。

【西尾学芸員】　それよりも、去年の１１月の段階で各館の開館日数から、各館の予想

できる収入をはじき出して、それを基に、この展覧会に幾らの助成金が必要ですということを計算して申請しているので、実は月曜休館にするだけで２０日以上開館日数が増えてしまうんですね。火曜も開館すると２０日以上開館日が増えてしまうということで、地域創造の担当の方と相談しまして、これはこのままでいきましょうと。

【鉄矢会長】　すいません、理解が悪いんですけど、助成金がもうこの額と決まっていて、その助成より欲しいと言っているわけではなくて、開くということはできないということなんですね。

【西尾学芸員】　そうですね。基本的に、もっとお金が入ってくるんだったら、これをどこか調整しなきゃいけないんじゃないという話になりかねないので。ちょっと遅かったんです。

【山村委員】　収入のことを言われるんですね。

【西尾学芸員】　はい。タイミングが悪かったです。

【山村委員】　収入が多いと、返せって言われる。

【鉄矢会長】　毎週火曜日、無料開放日にしたらどうですか。そんな、いかない？

【河合学芸顧問】　監視の人とか何かで、予算的なものが今度、それだけ増えてしまう。この場合、結構厳しいです。

【鉄矢会長】　難しいですね。

【河合学芸顧問】　常時、そういう人がここにプールされているならいいけども。

【鉄矢会長】　スケジュールとしては、この前のは開いて、コロナで終わったよって言ったけど、次のときに、まだ入ってないのかよっていう話ですよね。

【山村委員】　予定よりも休みを１日にしたことで収入が増えたら、その分は助成金からお返ししますというようなことはできないんですか。

【西尾学芸員】　私もそこまでの詳しい手続は、まだよく知らないのですけれども、今回は見送ると思うんです。

【山村委員】　難しいですね。

【鉄矢会長】　難しい計算式なんですね。

【山村委員】　これ、助成金のせいですなんて言っても、分からないですよね。

【鉄矢会長】　分からないですもんね。市民の方々には。何でやってないんですかって。

【坂井委員】　１回、その前に戻していますからね。

【鉄矢会長】　本当に何て説明すればいいんだろうというのが。

【西尾学芸員】　　少なくともコロナ禍で企画した展覧会だということしか、現状は言いようがないかなというふうには思っているんですけど。

【鉄矢会長】　　コロナ禍の日数計算でやった……。分かりました。何となく市民への説明責任がうまく、企画がその当時のものだからというふうに言うのしか、今のところないんでしょうね。

【山村委員】　　僕は、正直、助成金の関係でいいと思うんですけどね。分からなくても。ここで、市が予算を出しているんじゃないんだよということも含めて、それでいいと思います。

【鉄矢会長】　　市が出しているものだと思っていますもんね、市民はね。美術館の運営。こういう展覧会は。

　ありがとうございます。これで企画展のほうの話は終わって、では、２番目の意見交換としてよろしいですか。

【原田委員】　　資料２は？

【鉄矢会長】　　スケジュールを入れた図です。表です。

【中村学芸員】　　はい、そうですね。これが今２月から７月までという形になっておりますので、こちらの最初に報告させていたもので言いますと、所蔵作品展の会期が終わるところまでと、それから一部、福岡アジア美術館の巡回展のほうが、当館ではなくて、１館目の廿日市が始まるところというのが入っております。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

　では、次第２の意見交換としたいと思います。

【坂井委員】　　よろしいですか。今、先ほどまさに市がお金を出していると思っておりますというのとちょっと関係してくることになるんですけれども、アンケートの後半のほうにもちょっと名前が出ていた府中市美術館に行って来たんですね。企画展が見たかったというのもありますし、新聞の半面を使うほどのこんな企画展を府中市美術館でするんだというのに、私、行ったことがなかったので、結構びっくりしまして。府中市が、どういうあれで、こんな立派なあれができるのかくらいの好奇心で行きましたら、すばらしい美術館でびっくりしてしまいまして。企画展ももちろんよかったですし、若い方が多かったのも本当に驚きだったんですけれど、あれを建てたお金も驚きですね。

【山村委員】　　府中は、ＮＥＣとか、サントリーとか、東芝とか大きな企業がたくさん。

【河合学芸顧問】　　東芝とか。世界に冠たるラグビーの町ですよ。

【坂井委員】　　そうなんですか。

【原田委員】　　あさってまでやっている諏訪敦の展覧会、面白かったですね。参考になるなと思ったのは、多分、フルスペースを使ってなくて、３つの部屋くらいしか使ってなくて、割に小ぢんまりとした……。

【坂井委員】　　あれでフルじゃないんですか。

【原田委員】　　あれ、フルじゃないんです。だけども、何ていうのかな、企画がくっきりしているというかな、諏訪敦。

【坂井委員】　　よかったですよね。

【原田委員】　　すごく点数は少なくて、すぐ終わっちゃうんだけども、すごく心に残るなと思いまして、狭いところでも、鋭角的にやるといいのかなというふうにちょっと思いました。

　ついでに思い出したのは、喫茶店が入っていた建物、元アトリエ、ここのですね。喫茶店がなくなっちゃって、この間、新聞を見たら、どうもこの後入る当てがないと。当面は空き家ですと。

【坂井委員】　　そちらですか。

【原田委員】　　ついでに思い出したのは、はけの森の喫茶店が入っていた建物。美術品だから、なかなか難しい問題があるんだろうけども、このはけの森美術館の展示スペースの狭さを解消するために、あそこも使うということができないのかなとちょっと思ったんですけどね。展覧会の一部で使うのが難しければ、アトリエを再現したものがあそこに、というか、実際、あそこにアトリエがあったんですね。あの建物。建物自体は国の有形登録文化財に指定されましたよね、お茶室も一緒に。あの建物自体は美術品なんだけども、あの中に例えばアトリエを再現するとか、一体としてお客さんに見てもらうことができないのかなというふうにちょっと思ったんですけど、なかなか難しいんでしょうか、その技術的には。

【西尾学芸員】　　すいません、アトリエ自体は、この建物がもともとアトリエで、あちらは住居なので。

【原田委員】　　あそこはアトリエとして使ったことはないわけですか。

【中村学芸員】　　基本的には母屋で、居住スペースです。ちょうどまさに今この美術館が建っている辺りにアトリエが、かつて別にあったんですけれども、これは中村研一記念美術館を富子夫人が建てるときに、美術館を建てたいからアトリエを壊そうという判断を

して壊してしまったので、残ってないんですね。

【原田委員】　何かあのスペース、もったいないなと思ったんですけど、何か方法はないんでしょうか。

【西尾学芸員】　空調が完備されているところでしたら、作品を置いたりということもできるのですけど、恐らくは、作品を展示するに適した環境ではないので、置くとしても温湿度に差し支えないものに限定されてしまうかなとは思います。

【中村学芸員】　１回、実はあそこでの展示ということは、かつてムサシノはけの森カフェが入る前に、可能性として検討されたことはどうもあるんですけれども、ただ、先ほど西尾からも御指摘がありましたように、実はあそこの環境というのが管理としてはなかなか難しい環境で、特に湿度がかなり高くなりがちなんですね。飲食を伴う空間というふうに考えると、湿度も高いし、なかなかそういう保全が必要な作品を出せる環境かというと難しいところがありまして、湿度の影響を受けない、虫にかじられたりしないものというと、かなり限定されてしまうし、もしくは、そうなっても構わないものを展示するというわけにもいかないだろうということで、基本的には、そのときは現実的な話にはどうもならなかったようです。

【原田委員】　焼き物とかだったら大丈夫かなと思ったんですけどね。

【事務局】　委員会の最後にご報告をと思ったのですが、お話にあがりましたので事務局より報告します。はけの森カフェですが、実際に８月から臨時休業していたんですけれども、１２月末で正式に閉店という形になりました。壊れているけれど営業中のため修繕ができなかった箇所について、来年度の予算で修繕予定です。その後の活用について、美術館にとってあそこが、できたらカフェがいいとか、もしくはこういった使い方もあるんじゃないかとか、美術館とコラボをして、今ご意見があったように何か飾ったりとかというのもいいんじゃないかとか、今後検討していく予定でおります。

【坂井委員】　あちらのカフェも、言われてみれば、１年か２年くらいで終わっちゃったという感じですかね。

【事務局】　もうちょっとやっていました。五、六年。

【山村委員】　前のところは、家庭的で結構よかったんですけど。

【鉄矢会長】　私、勝手に思っているのは、この庭も大変なんですよね。庭の手入れの話がね。庭の手入れが大変だから、ここにそれこそ樹木医カフェじゃないですけど、樹木医が集っていろんなことを手入れしながら自分たちでカフェを経営してくれて、カフェは

趣味でやるということをしながら、実はこの中でメンテナンスしたり、庭をたくさん持っている御家庭が多いので、庭のお手入れのお仕事をもらうとか、ある意味、ビジネスをそこで起こす人たちが入りながら、おまけにカフェをやる。ＦＵＪＩＭＩ　ＬＯＵＮＧＥという、調布にあるんですけども、設計事務所がやっているカフェがあるんですよ。ランチとか出しながらやっているのを見ていると、そこでやっぱり地域の情報を取るので、特にこれだけの庭木をいっぱい持っている町のところの人たちにとっては、樹木医とは言わなくても、カフェなる造園屋さんを入れるとかいうのもありなんじゃないか。そうすると、そこに来ると、よろず相談じゃないけども、うちにこういう何とか虫がついちゃったんだけどさっていう話も全部聞いてくれるよとか。

【山村委員】　起業のコースというか、こういう授業をやるとか。

【鉄矢会長】　うち、教員養成の中にないんですよね。

【山村委員】　そうなんだ。教員養成にそんなのないんだね。

【鉄矢会長】　うちは教員ばっかりになっちゃうんで。

【山村委員】　尾道大学というのが、割とそういう……。

【鉄矢会長】　新しいビジネスをおこそうと。

【山村委員】　古民家を保存するのと、そこで若者が経営するのと、大学などが組み立てていますよね。ゲストハウスというか、ゲストが泊まれる民宿とか、大学が結構頑張った。

【鉄矢会長】　一橋大学がやっていますよ。

【山村委員】　産官学で地方としてはやっていたりしますよね。じゃないと、古い建物、どんどん壊されちゃう。

【鉄矢会長】　あそこのカフェも使って、日々出入りする人がいて、カフェに来るお客さんを待っている姿じゃないカフェにしたほうがいいような気がするんですよ。カフェに、いらっしゃいって言っていて、ケーキ残っちゃったというのは、物すごいへこむと思うので。そうじゃない何か動きをやっていて、ちょっとおまけでカフェやるぐらいの感じの、賃料をちゃんと払ってもらうぐらいというのができると。ここのお茶室とか、あそこの庭の様子がすごくきれいであったり。あと、市民が相談できる場所、ここに来るんじゃなくて、相談する人が多くなるぐらい。

　あとは、シェアキッチンとかやっているところもあるんですね。深大寺のそば屋の空き家を、いづみやというところが、今、土日にはいろんな人たちが来て、焼き芋屋が来て、

ドーナツ屋が来て、みんなそこで売っているんですけど。行ったら、ドーナツを売っている方は、小金井の方でした。なので、そんなふうな、市民が楽しく通ってなじめるような、チャレンジができるようなのもあるんだろうなと思って。

【山村委員】　　ですから、ある種、今、カフェというのは、美術館の附属施設みたいな形で位置づけられていましたけども、ある種の独立した、その自立性ですよね。それと、いろいろイベントなんかではコラボできる、そういうことですよね。生き残るというのは、結構そういうことなんだと思うんですけど。

【鉄矢会長】　　今、子ども食堂、多いですけど、この間、延岡に子ども食堂の取材へ行ったら、子ども食堂という名前のみんなの食堂で、昼間は孤独高齢者のランチを出しているといって、そういうことをやりながら。でも、いろんな人が、私はまだ働けるという人たちが手伝いに行って、みんなのコミュニティを支えているようなもので、そんなのもあるんだなと。美術館のムードを壊さず、何かやってくれるところがいいですね。

また何かアイデアがありましたら、これはコミュニティ文化課に言えばいいですか。

【事務局】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　こういう面白いのがあるよとかいうのを、視察情報とかあれば。

【山村委員】　　ＮＰＯ法人がやっていて、青森大学と。これ、見てきたんですけど、なかなかのものですね。手入れが大変みたいですけどね。

【鉄矢会長】　　谷中のｈａｎａｒｅというホテルがすごいですね。ｈａｎａｒｅというホテルのように、そこがロビーになって、ロビーとフロント機能だけあって、小金井に泊まってもらうという、お客さんの入れ方とか。ｈａｎａｒｅというのは、フロント機能だけが１か所あって、あとは谷中のちっちゃな普通の空き家を、民家をきれいにして、風呂なしだったりするところです。きれいにして泊まってもらう。気持ちよく、ブランド言っちゃいけないんだろうけど、無印良品のアメニティ全部入れて、さっぱりしたら、その空間してやっていて、料金にちゃんとお風呂チケットと夕飯紹介状が全部入っているという、セットで。

【山村委員】　　それはＮＰＯがやっているんですか。

【鉄矢会長】　　企業がやっています。ミヤザキさんという藝大の建築を出たやつがやっているんです。谷中、日暮里かいわいで五、六件やっていますね、いろんなビジネスを。

【坂井委員】　　空き家活用でもありますし、町の活性化にもなりますし、いいですよね。

【鉄矢会長】　　インバウンドがなくなって、物すごい冷え込んだみたいですけどね。ま

た今、復活し始めているから。

【山村委員】　　コロナで、こういうところは全部、影響出ちゃうもんね。

【鉄矢会長】　　では、何かアイデアがありましたら、コミュニティ文化課に。

【事務局】　　ありがとうございます。よろしくお願いします。

【鉄矢会長】　　次、事務局から議事録の構成についての説明をお願いします。

【事務局】　　本日、机上のほうに議事録を置かせていただきました。確認いただきまして、来月末までにはコミュニティ文化課までに修正のほうをお送りいただければと思います。よろしくお願いします。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

続いて、次回の運営協議会の日程についてですか。

（日程調整）

では、５月の１９日、１８時３０分より、平成５年度の第１回を開催するということで、よろしくお願いします。

ほかにありますでしょうか。

なければ、はけの森美術館運営協議会を終了いたします。どうもありがとうございました。

―― 了 ――